

義務教育指導班だより

北海道教育庁根室教育局教育支援課義務教育指導班

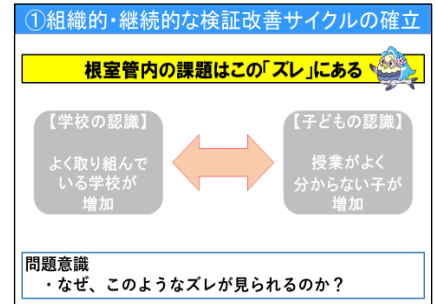
学力向上推進協議会の概要について

9月27日（火）に各学校の学力向上の担当教諭等が参加し、学力向上推進協議会が行われました。本協議会では、道や管内の現状の説明、中標津町立計根別学園と別海町立別海中央小学校の実践発表及び今後に向けた取組の構想、協議を行いました。本資料では、学力向上推進協議会の概要、今後の取組の在り方や参考資料等をまとめましたので、各学校の学力向上に向けた取組の改善・充実に御活用ください。

説明「全国学力・学習状況調査の結果の活用」

各学校においては、検証改善サイクルを確立する取組の充実が図られている一方、「授業の内容はよく分かりますか」という質問に対し、「どちらかと言えば当てはまらない、当てはまらない」と回答した児童生徒の割合が増加している傾向が見られているところであり、検証改善サイクルを行うこと自体を目的化せず、**児童生徒の学習状況を把握し、教育課程の改善につなげる**ことや**改善に向けた取組を学校全体で徹底**する必要があります。

参加者から、「自校の取組が、本当に目の前の子どもに必要な手立てなのか検証する必要がある」など、児童生徒の学習状況を捉え、改善することの大切さについての発言が多く聞かれました。



実践発表「管内の学力向上に係る取組」

中標津町立計根別学園 「全国学調の組織的な分析と分析結果を踏まえた学力向上の取組」

中標津町立計根別学園では、**なぜ、学校全体で学力向上に取り組むのか、自校は何をやり切るのかなど、目指す方向性、目的意識の共通理解を図りました。**

調査実施後は、教員が調査問題を解き、どのように指導する必要があるか協議し、正答率が低い問題については、授業や家庭学習等において、調査問題を再度解き直し、確実な定着を図るようにしました。

また、要因分析の結果を踏まえ、「**いつ・どの場面で・誰が・どのように**」取り組むのか、学校全体で**取り組む改善方を明確にしました。**

②調査結果の分析の具体的な取組
～学校の課題を明確にし、組織的に改善を図るために～

【本校の取組】

- ⑤ 分析チームによる要因分析に基づき、改善方を明確にする。
 - 校内研修（骨太研）で全教職員で協議
 - ・分析チームのリーダーから調査結果から見た子供の実態を説明する。
 - ・正答率の低い問題を全教職員で解く。
 - ・グループごとに改善方を出し合う。（好事例の共有）
 - ・「いつ・どの場面で・誰が・どのように」取り組むのが明確にする。

※経験年数の短い教員も、取り組める方策にする

別海町立別海中央小学校 「組織的に取り組む『授業改善』」

別海町立別海中央小学校では、学校グランドデザインを各分掌の取組や学年・学級の目標、日常の授業、子どもの目標につなげ、学校の教育目標の実現に向けて取り組んでいます。

校内研修では、**どのような授業改善の視点が必要なのか具体化、明確化し、合意形成を図りました。**調査実施後は分析会議を行い、**授業づくりの視点を明らかにし、指導案に明記するよう**にしています。また、「日常授業改善ワンペーパーチェックシート」を活用し、**定期的に日常の授業を振り返り、改善を図りました。**

(2) 先生方も「主体的」に「組織的に」学ぶ研修

R3年度 別海中央小学校 日常授業改善ワンペーパーチェックシート
授業者氏名(姓 名) R3年11月26日(金)記入者(姓 名) 氏名

④立ち回り/省察

1.「自己」課題（年層を選び、これら意識して指導にあたります。）

日常授業改善ワンペーパーチェックシート

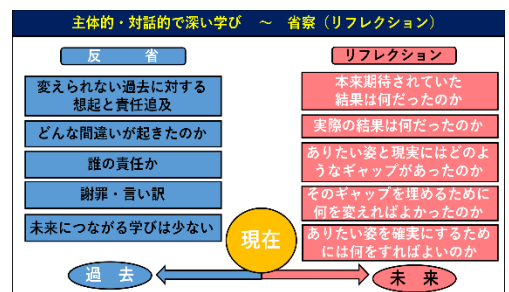
自己課題の設定
授業づくり・振り返りの視点
参加者の視点

授業改善の視点	達成状況	自己課題	参加者の視点
① 教科書の見方・考え方を深めた授業実践になっていたか。	○	○	○
② 児童・生徒で付いた「質問・能力が明確であったか（単元・単元、ゴールの提示）。	○	○	○
③ わらに合わせた学習課題（まよりの提示、必要事項の提示）になっていたか。	○	○	○
④ 主体的に学びに促す。課題との出会いと見通しとなっていたか。	○	○	○
⑤ わらに促し、思考を促せる場面になっていたか。	○	○	○
⑥ 意図的かつ、多様な関わりにより対話的な交流が設定されていたか。	△	△	△
⑦ 意図的に振り返りや学習意欲、意欲に促す場面が設定されていたか。	○	○	○
⑧ 振り返り、授業の学びの意図に効果的であったか。	△	△	△

今後に向けて ～省察（リフレクション）～

全国学力・学習状況調査の目的にあるように、各学校においては、**義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立て、検証改善サイクルを確立することが求められています。**

各学校においては、「**ありたい姿とギャップを埋めるためには、何をすればよかったのか、何をすればよいのか**」等を振り返り（省察、リフレクション）、改善に向けた取組を明確にし、学校全体で共通・一貫・徹底・継続して取り組むことが大切です。



本協議会での学び（参加者のアンケートから 一部抜粋）

- 検証しているが、やって満足していて、学校と子どものズレが生じていることにハッとなった（中学校）
- 授業改善の検証は、子どもの声に寄り添うことが大切であること（教育委員会）
- 学力向上の取組をやりっぱなしにせず、「なぜ取り組むのか」を問い直すことが大切であること（小学校）
- 計根別学園と中央小学校の組織的な取組や人材育成の取組を積極的に取り入れていきたい（中学校）
- 授業改善は一部の教員だけが取り組んでも、成果として現れないので、全教員が同じ方を向いて取り組むことが重要であること。まず、組織体制を整備して、チャレンジテストを分析したい（中学校）
- 自校の取組と子どもの姿のギャップがあることについて、すぐに指導計画の見直しを図りたい（小学校）
- これまでの取組を問い直す機会となった。改善に取り組む必要性を共有したい（中学校）
- 組織体制の構築や子どもの姿を軸とし、目的意識を明確にした校内研修の在り方について学んだ（中学校）
- 子どもの学習のつまづきをしっかりと見取ることが大切だと感じた（小学校）

自校の取組の改善を図るための参考資料

記述する力を高めるための学習指導のポイントを知りたい

アンケート項目の「もっと知りたいこと」で記載されていた内容に基づき、紹介しました

全国学力・学習状況調査の4年間の調査結果から今後の取組が期待される内容のまとめ（国立教育政策研究所）

第1章 小学校 国語

記述の指導の具体的な視点

1 記述の時間と場の保証

記述への抵抗感を軽減していくには、まず記述する時間や場を効果的に設定することである。国語科年間指導計画における、「書くこと」の指導に配当する時数のみならず、「話すこと・聞くこと」や「読むこと」の指導や言語活動における記述の時間や場を明確にし、意図的な指導につなげることが重要である。また、各教科等や学校生活全般を通して、記述することと関連する重点単元や教材を選定するとともに、そこで求める能力が国語科における既習事項が否かなどを確認して指導に当たるように努めることも大切である。

2 記述のテーマや題材の選択

記述の対象となるテーマや題材の選択が重要である。国語科の教科書教材のみならず、新聞や雑誌、インターネットなどの様々なメディアによる情報も活用できる。また、自己の読書生活や表現生活などの言語生活、実生活や実社会における直接的・間接的な生活経験も有益な題材になり得る。テーマや題材の選択の幅を広げ、3領域の指導で取り上げる教材として計画的に位置付けるようにすることが重要である。

第2章 小学校 算数

記述式の問題における学習指導のポイント

1 記述式問題から明らかになった課題

算数科においては、言葉や数、式、図、表、グラフなどを用いて、筋道を立てて説明したり論理的に考えたりして、自ら納得したり、他者を説得したりできることが大切である。そこで、算数科の主として「活用」に関する問題において、以下の3種類の記述内容にかかわる問題を出題している。

- 「事実」を記述する問題
「事実」を記述する問題では、計算の性質、図形の性質や定義、数量の関係の記述を求めること、表やグラフなどから読みだせる傾向や特徴の記述を求めることが考えられる。また、「事実」を記述する際には、説明する対象を明らかにして記述することが求められる。
- 「方法」を記述する問題
「方法」を記述する問題では、問題を解決するための自分の考え方や解決方法の記述を求めること。他者の考え方や解決方法を理解して、その記述を求めることが考えられる。また、ある場面の解決方法を基に別の場面の解決方法を考え、その記述を求めることが考えられる。
- 「理由」を記述する問題
「理由」を記述する問題では、ある事柄が成り立つことの原因や判断の理由の記述を求めることが考えられる。また、「理由」を記述する際には、「AだからBとなる」のように、Aという理由及びBという結論を明確にして考え、それを記述することが求められる。さらに、理由として取り上げるべき事柄が複数ある場合には、それらを全て取り上げて記述することが求められる。

中学校での授業改善のイメージをもちたい

公立高等学校入学者選抜状況報告書（道教委）

国語

(4) 中学校における今後の授業の在り方

○ 授業実践例

清少納言と自分のものの見方を比較し、自分の考えを表現する

指導事項
イ 現代語訳や語法などを手掛かりに作品を読むことを通して、古典に表れたものの見方や考え方を理解すること。
オ 文章を読んで理解したことや考えたことを知識や経験と結び付け、自分の考えを広げたり深めたりすること。
(思考力・判断力・表現力等) C読むこと (1) 考えの形成、共有

言語活動例
イ 詩歌や小説などを読み、引用して解説したり、考えたことなどを伝え合ったりする活動。

学習過程

【主な学習活動】
①『枕草子』を読み、清少納言と自分の「ものの見方」について比較するとともに、「ものの見方」に対して自分の考えをまとめる課題を設定し、学習の見通しをもつ。
②古文特有の言葉に着目し、語法と現代語訳と対応させて、「枕草子」の第一段と第四十五段を読む。
③清少納言のものの見方や考え方にについて、知ったことをノートに書く。
④第四十五段「うつくしきもの」に対する自分の「ものの見方」をまとめる。
⑤「うつくしきもの」に対する清少納言と自分の「ものの見方」を比較し、共通点や相違点について整理する。
⑥「ものの見方」について考えた内容を、グループで共有する。
⑦グループで共有した考えを踏まえ、清少納言と自分の「ものの見方」について比較し、「ものの見方」に対する自分の考えをまとめる。

【指導上の留意点】
■ ①について 学習の見通しをもたせるために、清少納言と自分の「ものの見方」を比較することと「ものの見方」について自分の考えをもつことが主な学習活動となることを伝える。
■ ②について 「やうやう」「さらなり」「なほ」「をかし」など、清少納言のものの見方を捉える際に注目すべき言葉を選び、その意味を確認させる。
■ ③について 自分が気付いた清少納言のものの見方や考え方を、作品の言葉や文を取り上げながら、簡潔に書かせる。
■ ④⑤について 「うつくしきもの」は、「物」に限定せず、「できごと」や「行動」にも広げて考えさせる。
■ ⑥について 共有するときに、内容のまとめ方について例示する。
私は、「うつくしきもの」について～と捉えていたが、清少納言は～と捉えていた。「枕草子」の文章を読んで、「ものの見方」というものは～だと考えた。
■ ⑦について グループでの共有を通して広がり深まった自分の考えを記録させる。
■ ⑧について ⑥で記録した内容を踏まえ、文章にする際の条件を設定し、自分の考えを表現させる。

○ 授業づくりのポイント
この単元では、時代の違いや個人の感じ方によって差異が出やすい「うつくしきもの」について、作者と自分の「ものの見方」の比較（学習活動③）を行った上で、他者と自分の「ものの見方」を比較（学習活動⑥）する活動を行った。このように、他者の考えやその根拠、考えの道筋などを知り、共通点や相違点をもつた自分の考えと比較したりすることにより、物事に対する新たな視点をもつ、自分の考えを広げたり深めたりすることができるような学習活動の一層の充実が求められる。

数学

(4) 中学校における今後の授業の在り方

○ 授業実践例

D データの活用 【中学校 第2学年 数学】

「どちらのコマを使うか判断しよう」
～データの傾向を読み取り、批判的に考察し判断する～

指導事項
(1)イ(ア) 四分位範囲や箱ひげ図の必要性と意味を理解すること。（知識及び技能）
(1)イ(イ) 四分位範囲や箱ひげ図を用いてデータの分布の傾向を比較して読み取り、批判的に考察し判断すること。（思考力・判断力・表現力等）

数学的活動
ア 日常の事象や社会の事象を数値的に捉え、数学的に表現・処理し、問題を解決したり、解決の過程や結果を振り返って考察したりする活動
ウ 数値的な表現を用いて論理的に説明し伝え合う活動

学習過程

【主な学習活動】
① コマ回し大会で、コマAとコマBのうち、どちらのコマを使った方が長い時間回ることができるかを判断するため、集めたデータの傾向や集まりの計画を立てる。
② データを収集し、集めたデータを表に整理する。
③ 収集したデータをヒストグラムに整理する。
④ データの傾向を捉え、コマAとコマBのどちらを選びか判断し、理由を説明し合う。
⑤ ④の過程を振り返りながら、データの傾向を捉え、コマAとコマBのどちらを選びか判断し、理由を説明し合う。
⑥ 低位置、中位置、高位置の三つの場合に分け、コマが回る時間と位置を整理する。
⑦ 低位置、中位置、高位置の三つの場合についての箱ひげ図を作成し、データの傾向を捉え、どの位置から回るとよいかを判断し、理由を説明し合う。

【指導上の留意点】
■ 問題発見、計画、データ収集、分析、結論の学習過程を生徒が自ら進んで進めるよう、生徒の思考を促し、生徒の思考を促すよう、生徒の思考を促すよう、生徒の思考を促すよう。
■ 収集したデータは、コンピュータなどを利用して整理し、その結果を基に説明するという一連の活動を継続できるようにする。
■ 生徒の判断が適切かどうかについて批判的に考察できるように、理由を説明し合う場面を設定する。
■ ④の振り返りを通じて生徒に自ら新たな問題を見いださせ、複数の集団のデータの傾向を比較して読み取る場面を設定する。
■ データの傾向を捉える場合、箱ひげ図のみを用いて説明することにより分布の形などの特徴が失われることも考慮し、必要に応じてヒストグラムなどを用いて説明する場面を設けることができるよう、⑦の過程を振り返り説明を位置付ける。

○ 授業づくりのポイント
この単元では、四分位範囲や箱ひげ図を学習することで、複数の集団のデータの分布に着目し、その傾向を比較して読み取り、批判的に考察して判断する学習場面を設定した。このように、日常生活や社会の事象を考察する活動を通して、解決の過程や結果を批判的に考察し判断すること、事象を数値的に解釈し、その根拠を数値的な表現を用いて説明すること、数値的に表現したことを事象に即して解釈する力を身に付けさせる学習活動の一層の充実が求められる。